

はじめに おっさんだつて生きている

「世界に目をやり、その問題を見てみれば、それはたいいてい年老いた人々だ。道を開けようとしない年老いた男性たちである」

二〇一九年十二月、米国のオバマ前大統領がシンガポールでこんなことを言ったらしい。

世界が激動・混乱するこの時代、「おっさん」たちは何かと悪役にされてきた。

トランプ大統領が誕生したのはおっさんのせいだ、EU離脱もおっさんのせい。どうして彼らは過去の「良かった時代」ばかりに拘泥し、新しい時代の価値観を受け入れようとしないのか。セクハラもパワハラもおっさんのせいだし、政治腐敗や既得権益が蔓延るのもおっさんたちのせい。リベラルの後退も世の中が息苦しくなっているのもおっさんのせいなら、排外主義も社会の劣化もすべておっさんが悪い。彼らは世の諸悪の根源であり、政情不安と社会の衰退の元凶だ。

なんかもう、おっさんは世界のサタンになったのかというような責められ方ではないか。

ただこれにはおっさん側にも言い分はあるだろう。だいたい「年老いた男性が道を開けない」とか言っても、彼らだって本当は道を後進に譲って隠居し、ゆったり暮らしていきたいと思っ

思っているかもしれない。が、高齢化が進む社会では年金受給開始年齢も上がる一方で、働け

る間は働かないと食っていけないからこちとら道を譲りたくとも譲れないんだ、老体に鞭打つて若者と張り合わなければならぬ身のしんどさを考えてみる、という切実なつらみを吐露したくなることもあるかもしれない。

それに、よく考えてみると、むかしは「お年寄りには道を譲りましょう」と言うのがふつうだったのであり、現代では「老いたやつが道を開けない」と言っておッケーになっているというのはけっこう無礼だ。そりゃいまのおっさんたちはベビー・ブーマー世代と呼ばれる人たちで、数がやたらと多く、それが一斉に年を取っているわけだから、ひとりひとり大切に道を譲っていたら若者の歩くスペースがなくなってしまう。それに、年寄りの数的圧迫感の下の世代にとってはおそろしい。こんなにわんさかいる世代の年金を、なんで少数の自分たちが負担しないといけないわけ、みたいな不平等感はいつしか嫌悪感に変わる。

しかし、同じ年寄りでもおぼはんはそこまで責められない。過去の「良かった時代」にすぎるとき、強硬にEU離脱を唱えていた中高年女性をわたしは何人も知っているが、おぼはんが世界のサタン扱いされないのは、やはり女性はマイノリティーということで糾弾を免除されているのだろうか。とかくいまの世の中、おっさんだけを別枠扱いし、問題はあいつらがのさばっていることだと言っておけば良識の持ち主でいられるらしい。

英国なんかだと、とくに「けしからん」存在と見なされているのは、労働者階級のおっさんたちである。時代遅れで、排外的で、いまではPC（ポリティカル・コレクトネス）に引つかかりまくりの問題発言を平気でし、EUが大嫌いな右翼っぽい愛国者たちということになってい

る。

とはいえ、おっさんたちだって一枚岩ではない。労働者階級のおっさんたちもミクロに見て行けばいろいろなタイプがいて、大雑把の一つには括れないことをわたしは知っている。なぜ知っているのかと言えば、周囲にごろごろいるからである。

彼らが世界のサタンになる前からわたしは彼らを知っている。だから、おっさんがサタンなぞという神の敵対者になれるほど大それた存在とは思わない。彼らは一介の人間であり、わたしたちと同じヒューマン・ビーイングだ。

おっさんだって生きている、生きているから歌うんだ。おっさんだって生きている、生きているからかなしいんだ、とつい歌いたくなってしまうのもそのせいだろう。おっさんの手のひらを太陽に透かして見れば、彼らの血潮だって真っ赤に（脂肪が増えて濁ってるやつもいるかもしれないが）流れている。さらにその年季の入った血管からは、現代社会の有り様だけでなく英国の近代史が透けているのだ。

そして、「おっさんは道を開けろ」と言われても、まだ人生という旅路にしがみつき、ワールドサイドをよるよるとほつき歩いている彼らの姿を観察していると、わたしにはある一つの世界を貫く真理が胸に迫ってくるのを抑えられない。それは、シンプルな言葉で表現すればこういうことである。

みんなみんな生きているんだ、友だちなんだ。

ワイルドサイドをほつつき歩け

ハマータウンのおっさんたち

主な登場人物 (↓以下は詳しい説明のあるページ)

レイ 一九五六年ロンドン、イーストエンドのレイトンストーン生まれ。元自動車派遣修理工。↓p13

レイチエル レイのパートナー。美容院経営。三人の子どもがいる。↓p14

ステイーヴ 一九五八年ブライトン生まれ。昔勤めていた工場跡地にできた大型スーパーで働いている。高年齢の母親と二人暮らし。マッドネスの元ファン。犬好き、本好き。↓p23

ジェフ 一九五六年レイトンストーン生まれ。闇の商売に手を染め逮捕服役。出所後、塗装業者に。二十代のタイ人の妻ナタヤとエセックス州で暮らす。↓p36

テリー 一九五五年ロンドンのフォレスト・ゲート生まれ。不良道を走ったのち、ブラックキャブの運転手に。銀行勤務の妻と高級住宅地に邸宅購入。労働党員。

↓p42
デヴィッド ロスチャイルド銀行勤務。アップバーミド

ルの金持ち(でも若い頃はスカが好きだった)。テリーの友人。↓p43

サイモン 一九五五年レイトンストーン生まれ。海外を放浪。配送業のドライバー。エセックス州に甥と住む。NHSと労働組合の力を信じる。↓p52・105

ダニー ロンドンのイーストエンドからエセックス州へ移住。生前は大変なイケメンだった。アジア旅行でベトナム人の二十代女性と知り合う。晩年癌にかかり、彼女が看取る。妹はジェマ。↓p82

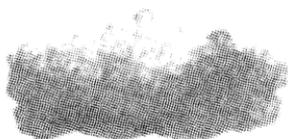
ローラ 一九六一年ウエールズ生まれ。NHSの元看護師。ロンドンにある不動産家賃と年金で暮らす。カスーが趣味。パートナーはマイケル。↓p98

ジャックシー シングルマザー。著者の家の隣に住む。「ガテン系」。↓p152

シヨーン 塗装業者。アイルランド系英国人。別れたパートナーとの間に息子と二人の娘がいる。↓p28・p162

第1章

This Is England
2018〜2019



注1

この章のエッセイには様々な曲が織り込まれていますので、それを聴き、歌詞も調べていたけると楽しさが倍増するでしょう。

注2

この章の出演者の多くは、『労働者階級の反乱 地べたから見たEJ離脱』(光文社新書)の「第II部 労働者階級とはどんな人々たちなのか (1)40年後の「ハートタウン」の野郎ども」にも登場しています。



1 刺青いれずみと平和

『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗・労働への順応』（ちくま学芸文庫）という有名な本がある。ポール・ウィリスという文化社会学者が書いたこの本は、一九七七年に英国で出版され、以降、エスノグラフィや教育社会学に携わる人々に多大な影響をおよぼしてきた。

なんて書くことやたら小難しい本のようであるが、要約すれば、英国の労働者階級のガキどもは反抗的で反権威的なくせして、なぜ自分たちから既存の社会階級の枠にはまり込んで行っちゃうのか。自らガテン系の仕事を選び、いかにもな感じの労働者階級のおっさんになりがちなのか。ということを研究した本だった。

わたしは一九九六年から英国に住んでいる人間だが、わたしの連合いは、この本の著者ウィリスが労働者階級の少年たちの調査を始めた一九七二年に十六歳になったのであり、この本に出てくる少年たちとちょうど同じ年代になる。ゆえに当然ながら彼の友人たちも同じぐらいの年齢の人々だ。

『ハマータウンの野郎ども』という書物に封印された少年たちは永遠に老いない。が、あれから四十余年。いまやすっかりおっさんとなり果てた現実の「野郎ども」は、転職ありリストラ

あり、養育費あり借金あり、暴動あり腰痛あり、の山も谷もある人生を送ってきた。労働者階級のクソガキとしてワイルドサイドを歩いていた彼らは、いつたいどのようなおっさんになり、何を考えながら人生の黄昏期を歩いているのだろうか。というようなことに思いを馳せるとき、うちの連合いや友人たちはその格好の研究サンプルになる。

例えば、連合いの幼なじみにレイ（仮名、以下の友人たちの名前も同様）というおっさんがいるのだが、簡単に彼の略歴を紹介しておくと、レイは一九五六年、連合いと同じ年にロンドンのイーストエンドにあるレイトンストーンという街で誕生した。父親は塗装業者、母親は清掃作業員で、典型的な労働者階級の家庭で育った。で、セカンダリー・スクール（中学校）を卒業した彼は、近所の自動車修理工場に勤め、三十代になったとき、一念発起して自分の修理工場を開くもやがて倒産。しょうがないのでRACに勤務することにした。RACという会社は、路上で車がガス欠を起こしたりして動かなくなった場合に修理工を派遣する「ロードサイド・アシスタンス・サービス」を行っている組織で、レイはその派遣修理工、一般に「RACパトロールマン」と呼ばれている人々の一員になった。

この頃の彼は、会うたびに仕事の愚痴をこぼしていた。それはだいたい「車が動かなくなつた」という連絡を受けて現場に向かってみれば、助けを待っていたカスタマーがめちゃくちゃ態度が悪かった、偉そうだった、無理難題を言いやがった、みたいな話であり、あの頃のレイは「BMWに乗った金持ちが世界で一番ファッキン性格が悪い」とか「アルファ・ロメオを運転している男は漏れなくIQが二桁ない」などの偏見を世にまき散らしていた。

そんなストレスフルな業務のせいか、レイはいつしか大酒飲みになってしまい、週末など土曜の朝から日曜の夜までぶっ続けて飲んでいることもあり、そんなことをしているとえらいことになりやすよ、もう若い頃とは違うのだから、とたしなめていると本当に肝臓を患って「このままでは死にますよ」と医師に言われた。だから、すっぱり酒をやめ、人生の仕切り直しを図ることにしたのである。こんなときこそ家族の支えがたいせつになるが、人生を仕切り直す前に愚痴っぽかったのに加え、泥酔して暴力的になることもあったため、病院から出てきたら妻子が蒸発していた。

レイは衝撃を受けたが、「まあ俺の人生だから、こんなもんだろう」と事態を意外と冷静に受け止め、断酒を続けながら職場復帰して地道に仕事をこなした。しかし、毎日ファミリーのいない家に帰るのも寂しいし、もうパブにも行けないし。ってんで、スポーツジムに通い始めたら、そこでピンクのトレーニングウェアにヒョウ柄のコートを着てやってくる、ブロンドの若い女性を見初めてしまう。で、半年ぐらい遠くからぼうっと眺めていたら、そんなおっさんの不器用で熱い視線に女性のほうも気づいたのだろう。ある日、なぜか彼女のほうからお茶に誘ってきて、あれよあれよという間に同棲を始めていた。ハピネスとはどこに転がっているかわからない。

このセクシーな三十代の女性はレイチェルといい、実はやり手のビジネスウーマンで、ロンドン東部に二軒の美容院を経営し、本店で自分も美容師として働いている。が、過去の複数のパートナーたちとの間に三人の子どもがいて、現在はシングルマザーだった。だから自分が働

いている間は子どもを保育園に預けたり、ベビーシッターを雇ったり、育児面での出費がかさんでいた（ロンドン市内で二歳児をフルタイムで保育施設に預けると、一カ月の費用は一人あたり約十五万円。複数の子がいるともうその支払いだけで大変だ。それに美容師は週末が忙しいので、ベビーシッターも雇わなければならない）。で、レイは四人の子どもを育て上げたベテランの父親だったし、ここは彼が仕事をやめ、レイチエルの三人の子どもの面倒を見ながら家事をこなしたほうが、経済的に安上がりだよ、ということになって、レイは早期退職したのだった。

そんなこんなで過去六年ばかり、パートナーとして幸福に暮らしてきたレイとレイチエルだったが、二人の間に大きな亀裂を生じさせる出来事が勃発した。二〇一六年六月のEU離脱（ブレグジット）の国民投票である。国民投票が近づくとつれて、それまですこぶる順調だった家庭生活に暗雲が立ち込めてきたのである。

「英国は離脱したほうがいいなんて何考えてんのよ、あんた！ あたしのビジネスはどうなるの？　うちは美容師も顧客も、はつきり言って七〇％はEU圏からの移民なのよ」

とレイチエルが激昂すれば、レイは

「そうやってロンドンを外国人に明け渡したのは、EUなんぞの言うなりになってグローバル資本主義を進めてきた政府だ。だいたい俺らはブリュッセルのEU官僚なんて選挙で選んでねえんだぞ。俺らの国の主権はどうなってんだ」

とやり返すし、

「偉そうなことを言って、結局はあんた、レイシストなのよ」

「国境をどう管理するか、自分たちで決められる力を国が取り戻すべきだと言ってるだけだ」
「ほら、やっぱり単なるレイシスト」

「主権を取り戻すことはレイシズムなのか？」

などと毎日喧嘩ばかりしているものだから、子どもたちまで徐々に暗い性格になり、一番下の子などはまだ七歳なので「両親がブレグジットのせいで別れるかも」と泣きながら小学校の担任に相談したりするような有様だった。

そんなこんなで迎えた国民投票の日。レイは、最終的には「どうせ残留派が勝つんだから、できるだけ追い上げて政府やEU官僚たちをビビらせてやろう」といった気持ちでやっぱり離脱に投票したという。

だが。

国民投票の結果はレイの予想に反したものになった。二〇一六年六月二十四日の早朝、国民投票の結果が発表されたときの心境を、彼は「最初のガールフレンドから妊娠したと言われたときぐらいびっくりした」と表現した。正直なところ、「ヤバい」と思ったらしい。だが、それは今後の英国社会はどこに向かうのか、というようなマクロな「ヤバみ」というよりは、もっとミクロレベルの足元の問題というか、要するに家庭内における「ヤバみ」だった。

案の定、レイチェルは半狂乱になって、「もう顔も見たくない」、「EU移民が国に帰ってあたしのビジネスが成り立たなくなったら、貴様も優雅に隠居なんてできなくなる」、「おまえのせいで英国が、ひいては全世界が減じる」とぼろくそにレイをこき下ろし始めたのであり、も

うこんな家にはいられない、とうんざりしてパブの片隅でオレンジジュースを飲んでいたら、今度は息子から携帯に電話がかかってくる。

「すごいことになったね。レイチエルに聞いたんだけど、父さん、まさか本当に離脱に入れたの?」

単刀直入に聞かれて、レイが「イエス」と答えたら、今度はこっちも携帯でいきなり大説教大会だ。レイの長男は、レイがEU離脱投票の結果を知ったときと同じぐらいびっくりしたという最初のガールフレンドの妊娠の結果として生まれた子どもだったが、「俺の子どもたちの中では例外的な出世頭」と彼が形容するような出来のいい息子だった。

もう四十代になるこの長男はレイチエルよりよっぽど年上になるが、ドイツ系の銀行で働いていて、行内で知り合ったオランダ人の女性と結婚し、長年ドイツで暮らしている。

「あいつの時代はまだ大学教授料が無料だったんだよ。階級上昇の可能性をもっていた最後のワーキング・クラス・ジェネレーションさ」とレイが言うこの長男は、いい年をして離脱に投票するなんてどうしてそういう分別のない行動をとったのか、いい加減にしてほしい、とレイを非難した。

「あいつ大学出のエリートで頭いいから、議論じゃ俺に勝ち目はなくて、なんか一方的に怒られてるって感じ……」

わが家の居間でつらそうにレイが言ったときには、わたしは不謹慎にも思わず笑ってしまった。「ははは。離脱に入れたばかりに、パートナーに叱られ、息子に叱られ……」

あれからもうすぐ一年半。ブレグジットの交渉も混沌と迷走の^{たど}一途を辿り、英国政府もメイ首相もどうすればいいのかよくわかってないぐらいなのだから、そんなものは国民だつてわからない。毎日のように状況がコロコロ変わるものだから、連日マスコミも「ブレグジット」「ブレグジット」と連呼し、それを見るたびにレイチェルやレイの長男がまたムカついて「すべてお前のせいだ」とレイを叱りつける。そうなるとレイもムキになって言い返すし、理論で勝てない場合には声を荒らげたりして、怒鳴っていることも往々にしてある。

しかし、いつまでもこのような殺伐とした日常を続けられるものではない。歩み寄り。つて大事なんじゃないかな、とレイは考えるようになった。大人たちの分断に怯^{おそ}えている子どもたちのためにも、関係修復への姿勢が必要なんじゃないかと。

「違う考えを持つ者たちがさ、一緒に暮らしていくのは可能なんだってことを、大人はそれができるんだっていうアクチュアルな姿をね、子どもたちに見せることが大事なんじゃないかと思つて」

「おお。いいこと言うじゃん」

「その決意っていうか、覚悟っていうか、それをまず俺が見せようと思つて」

「どうやって？」とわたしが聞くと、レイは言った。

「タトゥーで」

「……は？」

「PEACEという意味の漢字のタトゥーを彫つて、レイチェルに見せようと思つてる。それ

が俺からのメッセージだ」

「……」

刺青と平和。その関連性はよくわからんけれども、レイが決めたことである。やればいいじゃん。

と思っていると、先日、早くも携帯にレイからSMSメッセージが届いた。

「Rachel likes it.」と書かれているので、わたしは添付の画像を開いてみた。

誇らしげに笑いながら右腕上部、ちょうど二の腕の外側のあたりをこちらに見せて立っているレイ。彼の背後には、「もう一度あんたについていくわ」みたいな微笑を浮かべながら彼の肩に手をのせているレイチェルも写っている。

おお、ついにレイ宅にも平和が訪れたか。と思いながら、彼の右腕上部に彫られた漢字のタトゥーに視線を移した。と、何かその形状に異常のあることにわたしは気づいたのである。

中和。になっちゃっているのだ。平和ではなくて。

またネットか何かで適当に漢字の翻訳を検索したら出てきた情報に誤りがあったのか、或いは彫り師の技術上の問題でつながってはいけない部分がつながってしまったのか、そこはわからない。が、レイのタトゥーは当初の意図とは微妙に違った意味合いになってしまっているのだが、そのことをわたしはまだ伝えられずにいる。なぜってわたしの頭の中に祖国の古い流行歌が聞こえてくるからだ。

いいじゃないの幸せならば。